前号作品短評A〈小野澤〉

●離り住む老父母訪へば野良猫が姿を見せぬ小さき白毛の　梅津純子

読み方は、訪へば、小さき、か。タイトル「野良猫シロ」一連から、冒頭の歌。ちなみに一連掉尾は、訪へば、に対して「帰る吾」の歌、こんなよう、

帰る吾を見送る父母の後ろには野良猫シロも現れ座る

この間にこの猫との（についての）やりとりがあることになる。小猫で白猫であること、「両眼は金と青色」であること、など。大猫も登場する。いろいろ情景が浮かぶ。

白猫をあはれと父が棒をもて大猫庭より追ひ払ひしとふ

正月に帰省せる折戯れに野良猫シロに食べ残し与ふ

唸り声にみれば昨日の白猫が鼠を銜へ吾を見上ぐる

野良猫であること（境遇）は変わったのか変わらないのか。そんなことはどうでもいいのかもしれない。ある種の関係性、父との関係は次の歌のよう、

日をおかず現るるらし白猫はボス猫追ひし父頼るがに

猫の動画をみることが多いが、つどストーリーがある。この一連にも感じるものがある。

●たまに行く鍼灸院の本棚に置かれゐるノバク・ジョコビッチの本　布宮慈子

しっかりと起承転結のあるような一連、その導入部の歌。そうだ、ノバクだった。の本、がいい。どの歌にも（ある）ジョコビッチ、またはノバク・ジョコビッチ。ここでは鍼灸院、じぶんには本棚は歯科医院。

問題意識は、二首目から四首目にあるようだ。時々バテる試合中に、ある人が言ふ問題は食事と、ゲーム中に倒れてしまふ、など。そこでこの歌、次の歌、その次の歌、

グルテンを含まぬものを食べてからノバク・ジョコビッチ強くなりたり

冷たいもの摂らないといふジョコビッチが朝起きて飲む常温のみづ

朝食に二匙のマヌカハニー、ナッツ、果物を取るといふジョコビッチ

グルテンフリーというワードもある。マヌカハニーは、検索するとニュージーランドに特有のマヌカ（フトモモ科の常緑低木）の花からとれる蜂蜜のことで、稀少（歌では二匙）、抗菌成分を多く含むという。こういうことが記事や動画になっていたら、ついつきあってしまう、という人は多いか（健康志向、ライフスタイル）。じぶんもそう。まだある、

眠れぬとき瞑想するといふジョコビッチのストイックさは東洋的なり

一連全体にながれがあり、よみやすい。ジョコビッチの人となり、その精進がわかるよう。

前号作品短評B〈慈子〉

●こどもいてついてきている犬もいる初の稽古かテコンドー道場　　小野澤繁雄

「正月」と題する一連の二首目。テコンドー道場の近くを通りかかった作者は、初稽古かなと思う。稽古に通っているのは、こどもだろうか、おとなだろうか。どちらとも取れるので断定はできないが、こどもの可能性が高いか。そうすると犬を連れたおとなが付いてきているシチュエーションとなる。柔道とか剣道ではなく、テコンドー道場が正月風景となっているところが現代風である。少しのんびりしたお正月の雰囲気も、格闘技の激しさを緩めていて面白い。

元日もごごともなれば沼畔はバドミントンをしている家族
大きな車になってゆくこの家に子ども育ってその段階に

お正月の羽付きならぬ、バドミントンをする家族を描いている。バドミントンのほうが身近にあるから、しっくりくるようだ。「ごご」という平仮名の表現は作者独特のものだが、文章では『京都ぎらい』の井上章一さんも多用する。それぞれの美学があるのだろう。また、作者はよその家族をよく観察している。子どもが大きくなっていくに従って、車も買い換えられて大きくなったのだ。そのような変化を、かつての自分と重ね合わせているのかもしれない。

●本売れぬ時代に本を多喜二の忌　　新野祐子

詞書に『出稼ぎの時代から』出版を記念する八句、とある。「多喜二忌」は春の季語。短信で「四年前、同タイトルの映画を仲間たちと制作した。その一時間の映画には盛り込めなかったことが多すぎるという監督の強い思いを汲んで、同じ仲間で本を作ることにした。約一年半後の昨年九月に出版することができた」という。その本を読んでみると、やはり文字にすることの意義を思った。それぞれの人の思いがじかに伝わってきて、インパクトがあるのだ。

冬座敷椅子テーブルにかつての若人
熱燗やこごえし夜々を忍びては
菜っ葉服脱いで野の人手橇引く
鉱脈の新たな切羽春動く

むかし出稼ぎをした人たちが集まって、出版を祝っている場面。熱燗は、しみじみとその時代を思い出している情景を伝える。「菜っ葉服」は、労働者などが着る青色の仕事着、また、それを着る労働者をあらわすという。かつての労働者が、故郷でゆっくりと木などを運搬している様子がうかがわれるが、一種の象徴かもしれない。「切羽」は、鉱石または石炭を掘り取る現場、採掘場、切り場のこと。本を出版したことで、新たな景色が見えてきたのだろう。